【調査研究事項番号Ⅰ】横浜市立蒔田中学校夜間学級

「中学校教育を実施するに必要な日本語指導の在り方」

Ⅰ．調査の目的・問題意識

本市では、令和６年２月末時点で外国人人口が約11万７千人で全国市区町村では大阪市に次いで２番目の規模である。令和２～４年にかけて新型コロナウイルス感染症対策の入国制限等により一時人口が減少していたが、それ以前は５年間で外国人人口が約３割増加している状況である。また、令和４年の入国制限等の緩和以降、過去最高の外国人人口を更新している。

本市蒔田中学校夜間学級においても、日本語指導については、蒔田中学校の近くにある高校内に設置している日本語教室の利用のほか、課題別学習の時間を設け、個人の課題に応じた学習を行うことなどにより、日本語を含めた基礎学力の一層の充実に取り組んでいる。

令和５年度入学予定者は、年齢層や国籍が異なりそのほとんどが日本語指導を必要としている。また、国語・数学・英語の習熟度や、音楽や体育などの科目における事前の知識等にも差異がある。これらの現状を記録としてまとめ、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定し、日本語初期指導を始めとした、教科学習に必要な学習言語の指導や、日本で生活するうえで必要な情報の提供等をし、本市の生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げる等、きめ細かな指導体制の構築及び教室等の教育環境整備など、さらなる教育活動の充実を図ることを目的として本調査研究を実施する。

２．調査研究の内容

生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げ、更なる教育活動の充実を図るために、本市におけるこれまでの夜間学級の経緯を振り返り、次の内容について調査研究を行う。また、今後の夜間学級の更なる充実のためにも、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定し、年度末に研究紀要を作成し、一年間の研究の成果をまとめ、次年度以降の実践に繋げていく。

一年の流れとしては、下記のようにまとめられる。

【入級時】

〇学級担任との教育相談（二者面談）

目的：一人ひとりの生徒の現状について把握し、自己実現に向けた手立てについて検討する。

内容：日本語と英語の理解度について、横浜市日本語教室（集中教室）への参加について

〇補助教材の選定

・生徒の学力、日本語の習熟度等に応じた補助教材を検討、決定

【５～７月】

〇夜間学級担当者会の実施

・習熟度別少人数授業の在り方について
・学習支援サポーターによる支援の方法について、効果的な支援方法の検討
・各教科担当における日本語指導方法の確認
・日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方
・効果的な漢字学習の在り方について
・日本語習得を目指した読書活動の在り方について

〇日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動の実施
・遠足、芸術鑑賞の実施

【9～12月】
〇夜間学級担当者会の実施　講師を招いた研修会の実施
・習熟度別少人数授業の在り方について
・学習支援サポーターによる支援の方法について、効果的な支援方法の検討
・各教科担当における日本語指導方法の確認
・日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方
・効果的な漢字学習の在り方について
・日本語習得を目指した読書活動の在り方について
〇学級担任との教育相談（２者面談）
・学習について、長期休業後の日本語習熟度の確認
〇日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動の実施
・芸術鑑賞、卒業遠足の実施
〇３年進路面談実施（３者面談）
〇高校進学希望者への日本語教室面接練習会への参加指導等

【１～３月】
〇夜間学級担当者会の実施、職員研修の実施
・１年間の振り返り、年間日本語指導計画の作成
・効果的な漢字学習の在り方について
・日本語習得を目指した読書活動の在り方について
〇学級担任との保護者面談（３者面談）
〇日本文化、日本における社会生活などの効果的な体験活動の実施
・球技大会、感謝を伝える会、卒業証書授与式等の実施
〇研究紀要の発行、配付
・生徒の文集の部分で、この１年間の日本語能力の向上、一人ひとりのがんばりや思いを確認
〇夜間学級入級説明会実施
・夜間学級紹介（授業、行事、学校生活、持ち物等）
・プレオープンスクール説明
・入級予定者の日本語能力の確認
〇プレオープンスクール実施
・日本の学校生活の体験
〇夜間学級案内の多言語版作成、配付
・やさしい日本語、英語、中国語、スペイン語、ベトナム語、タガログ語、ネパール語、韓国・朝鮮語版を作成し、各区役所及び国際交流ラウンジでの配付、及び本市ＨＰでの掲載

次に、各テーマ別に事例と成果や課題についてまとめていく。

１）本市における夜間学級の取組（歴史含）
６）これからの夜間学級に求められること（ハード面・ソフト面）
毎年、年度末に研究紀要を一年の成果としてまとめてきた。さらに、横浜市立中学校夜間学級が本校に統合されて10年の節目である今年度、記念誌作成を行った。統合前の情報も可能な限り集め、整理をすること

で本市における夜間学級の取組について、歴史的な経緯や変遷を含めてまとめることができた。本誌は今年度末に発行予定である。詳細は、そちらを参照されたい。

２）習熟度別少人数授業の在り方について

毎月、専任教諭だけでなく、教科担当の非常勤講師、学習支援サポーター、養護教諭も含めて、夜間学級の担当者全員が参加する、夜間学級担当者会議の実施をすることを通じて、習熟度別少人数授業のよりよい在り方について常に情報交換と実践検討を重ねている。また、各教科担当における日本語指導方法の確認をすることで中学校教育を実施するに必要な日本語指導の在り方について検討している。

成果としては、各教科で、ふりがな付きの教材や英語訳や母語訳付きの教材を作成したり、イラストや映像教材を活用する等の工夫を行い、日本語力向上に役立った。教科学習の語彙力を高めるために、各教科で日本語の音読や日本語の意味の確認を丁寧に行った。タブレットやクロームブック等の ICT 機器の活用により、映像や画像等、視覚に訴えるような授業展開が今まで以上に可能となった

課題としては、生徒の日本語能力以外に、学習内容の知識にも大きな差があるため、日本語能力だけで習熟度に分けると、学習の習熟度が大きく違うことがあり、指導が難しい場合もあった。教科書の母語の翻訳資料があると学習内容の理解が進む。翻訳には外部の支援が望まれる。各教科の担当教諭が、教科指導だけでなく、日本語指導もしながら、授業を行なわなければならならず、負担は大きくなってしまう。

３）日本語補助教材の選定について

平成30年度より公益財団法人三重県国際交流財団発行の日本語指導テキストである「みえこさんのにほんご」「続みえこさんのにほんご」および「れんしゅうちょう１」「れんしゅうちょう２」を主たる日本語補助教材として使用してきた。しかし、主に小学生向けの内容であるために、今年度は新たな日本語補助教材を模索してきた。

そこで、「れんしゅうちょう１」に代わる教材として、横浜市日本語支援拠点施設作成の「ひまわり練習帳　そら１・２」を使用している。基本的な書字動作を身に付けている年齢層である本校生徒には、よりコンパクトにまとまっている、これらの教材がより適切であると判断した結果である。

また、「みえこさんのにほんご」と「続みえこさんのにほんご」は、今後も引き続き基礎的な教材として使用しながらも、ある程度日本語学習の基礎ができている生徒に対しては、発展的な教材として「中学生のにほんご　学校生活編」「中学生のにほんご　社会生活編」を併用して、夜間学級生徒の学校生活により直結した教材内容で日本語学習を進めることができたのが成果である。

今後も、対象生徒の日本語力や特性に合わせて、適切な指導教材を選定することが重要である。

４）学習支援サポーター（通訳支援スタッフ）を活用した教育活動の在り方について

本校には、来日間もなく日本語がほとんどわからない状態で入級する生徒も多い。専任教諭が全員多言語での対応ができるわけではない。そのため、常に通訳が必要な生徒がいる中、学習支援サポーター（通訳支援スタッフ）がいない日もあり、対応が難しい時もあった。学習支援サポーターによる中国語、ネパール語、タガログ語での学習支援により、学習の理解度が高まった。また、必要に応じて面談にもサポーターに同席してもらい、外国籍の生徒や保護者との意思疎通を図ることができ、生徒が安心して学校生活を送ることにもつながったため、夜間学級を運営するうえで必要不可欠な存在である。

現在は、３名の学習支援サポーターが週３回ずつ勤務しているが、さらに充実した支援体制を確立していく必要がある。

５）横浜市日本語教室（集中教室）や日本語支援拠点施設等（ひまわり）との連携による成果と課題について

希望する生徒は横浜商業高等学校の日本語教室に週２回通って、日本語学習を行っている。本校は、入級後集中的に日本語指導をするのではなく、すべての教科通して日本語指導を行うカリキュラムであるため、今後も日本語教室との連携は継続していきたい。日本語拠点施設では、受験期に面接練習会を実施し、例年本校生徒も参加している。今年度は、対象生徒がいなかったが、今後もこういった連携は継続していきたい。

課題としては、日本語教室の授業の時間によっては、夜間学級の一校時目の授業に重なり、１週間に２回ほど夜間学級の１校時の授業に出席することができないという点がある。また、授業時間の関係で仕事との両立が図れず、希望していても日本語教室に通うことができない生徒もいる。

７）日本語能力試験（JLPT）取得を目指した指導の在り方について

外国籍生徒には、令和元年度より積極的に日本語能力試験（JLPT）取得を勧めている。進学や就職にも有効な資格の取得を目指すことは、日本語学習の意欲につながっていると感じている。生徒は自分自身の日本語能力に合わせてＮ１～Ｎ５の受検級を選択し、学習をしている。主に、国語の教科学習や課題別学習の時間を通じて、市販の問題集を教材に学習を進めている。今後も継続して取り組んでいきたい。

８）効果的な漢字学習の在り方について

９）日本語習得を目指した読書活動の在り方について

課題別学習の時間に、読書の時間を設けたり、漢字練習や漢字テストを行ったりすることによって、日本語習得への意欲が高まった。その結果、各教科の学習の促進につながり、生徒間の日本語でのコミュニケーションが活発になった。また、eboard という ICT 教材を利用することで、ふりがな付きのデジタルドリルや映像教材を使って、学習進度や理解度に差がある生徒も自分に合った課題で学べるようになった。eboard は、AI 型学習ドリルではないものの、ふりがな付きデジタルドリルで繰り返し復習できることによって、小学校漢字の定着にも一定の成果が見られた。

３．調査研究を踏まえた今後の取組方針

今年度の本校の取組について、成果と課題をまとめてきたが、年々入級者の学びのニーズが多様化している現状がある。常に変化する社会とともに、本市における夜間学級の中長期的なビジョンを策定し、日本語初期指導を始めとした、教科学習に必要な学習言語の指導や、日本で生活するうえで必要な情報の提供等をし、本市の生徒の現状に適した教育課程及び効果的な学習指導の実践に繋げる等、きめ細かな指導体制の構築及び教室等の教育環境整備など、今後もさらなる教育活動の充実を図っていきたい。

【調査研究事項番号Ⅰ】　団体名　大阪市教育委員会

「Ⅰ．教育課程、教育環境整備に関すること」

目的と現状

◆目的

- 中学校夜間学級において教育機会の提供拡充をより一層推進するために、生徒一人一人の実態に応じた教育内容の充実と効果的な指導を行うことが必要であり、そのような指導の向上を図るための調査研究を行うとともに、その成果を積極的に広報する。また、さまざまな生徒への教育機会の提供拡充に資するため、中学校夜間学級について広く他都市の情報収集及び情報提供を行う等、調査研究を推進する。

◆現状

- 本市では、四つの夜間学級を設置し、在籍者数は近年減少傾向である。一方で、義務教育未修了者に加えて入学希望既卒者、外国籍の者等、受け入れる生徒は多様化している。そのため、年齢や国籍、生活習慣が異なる生徒への対応が難しい部分もあり、生徒一人一人に寄り添った学習指導が求められる。また、小学校未就学の者から中学を卒業した既卒者まで在籍するという現状において、一人一人の習熟の差は大変大きく、通学の目的も中学校教育の履修のみならず、高等学校受験など多様である。

成果と課題

◆成果

- 生徒文集の作成について、1年間の学級活動の柱として、年度当初より取り組んだ。文集指導を通して、生徒理解を深めながら、生徒の日本語運用能力の育成を図ることができた。また、文集作成を通して、生徒が入学前の自身の姿を振り返り、共有することで、自己肯定感の醸成につながった。各校で作成した文集を、学校協議会や昼間の学校、地域等に配付することにより、夜間学級の広報に努めたが、一人でも多くの方の就学機会の提供できるよう引き続き周知に係る広報活動の工夫、改善が課題である。
- 2023年度近畿夜間中学校生徒会連合会新入生交流会、第50回近畿夜間中学校連合運動会及び、2023年度近畿夜間中学校連合作品展が実施され、近畿圏内の学校との交流を含めた連携ができた。また、第69回全国夜間中学校研究大会では、実行委員会等事務局との連携を通じ、取組の充実を図ることができ、その資料を活用し、他都市の情報収集に努めた。その成果として他都市の先進的な取組を比較ができ、授業の充実を図ることができた。
- 校外の研修会等にはオンラインを併用して参加するとともに、研究授業、教材作成や日本語指導に係る意見交換等については校内研修を実施した。その結果、教育活動のあり方について、他都市の情報を参考に、研究を進めることができた。
- 他都市との情報交換については、大阪府内の学校と積極的に情報交換を行い、それぞれの課題や教育実践の交流ができた。
- 校外学習を実施することができ、学齢期に十分な教育を受けることができなかった生徒にとって、校内の教育活動では体験できないことを学び、非常に貴重な機会となった。

◆課題とこれから

- これまでの求められていた夜間中学が、時代と共に大きな変革期を迎えている。生徒の多様化や、個に応じた対応への課題等、個々の学校での対応は難しいため、一人でも多くの方の就学機会を提供できる周知に係る広報活動の工夫、改善や個に応じた対応が充実する等、大阪市として課題解決に向けた取組を進める必要がある。抜本的な見直しを今後も引き続き検討していく。

【調査研究事項番号Ⅰ 教育課程、教育環境整備に関すること】

団体名　大阪府岸和田市立岸城中学校

「中学校教育を実施するに必要な日本語指導の在り方」

調査の目的・問題意識

◆目的

・９割の生徒が外国籍であるという現状を踏まえ、中学校教育を実施するために必要な日本語指導の在り方を追求する

◆問題認識

・日本語の理解に課題を抱える生徒に対して、充実した中学校教育を受けてもらいたい

創出した先進事例

◆実施に向けて検討した方策

・個に応じた指導体制の整備
・学習指導の充実
・教職員研修の充実と指導力向上

◆検討した方策の分析

・生徒個々の教育的ニーズに対応できるよう課題や目標を適切に把握することに努めた
・小中学校の国語の学習指導要領を基本に日常で使う日本語を更に簡易にしたものを活用した

◆実際に行った方策

・各学習コースについて可能な限り複数の教員を配置し丁寧な指導体制の構築に努めた
・国語は日本語①・②・③・国語の4コース、数学はA・B・Cの3コースに分けて指導
・タブレットの活用
・教員の日本語指導力の向上に向けて年間を通じて4回講師を招いて研修を実施

◆生じた成果・効果

・主に日本語に関するアンケートを年2回（1学期・3学期）実施した結果、滞在期間が長くなったとの理由も考えられるが、概ね日本語の理解が確実に進んでいた
・日本語指導指導員が教材を紹介する等もした結果、教職員全体の指導力向上を図ることができた

◆課題

・本校には昼に働いた後登校する外国籍の生徒が多く、継続して出席できる生徒が少ないため、学習の定着が困難な生徒が多い

調査研究を踏まえた今後の取組方針

◆教員の更なる日本語指導力の向上と教材の充実

・本校には現在日本国籍の方を含め１６か国の方が在籍している。この傾向は今後も続くと考えられるので、教員には日本語指導力の更なる向上と教材の充実が求められている

【調査研究事項番号Ⅰ】団体名 八尾市立八尾中学校夜間学級

「教育課程、教育環境整備に関すること」

調査の目的・問題意識

◆目的

- 中学校教育課程の学習の土台となる小学校教育課程の学習や、日本語の習得に向け、生徒の実態に応じた教育課程の編成と教材を作成する。（外国籍生徒の日本語指導、特別支援学級生徒、小学校課程を含む。）
- 生徒たちが日本社会で安心、安全な生活を営むための「生きる力」を習得できるよう、教育環境・相談体制を整備する。

◆問題認識

- 進路保障と生活相談や不登校経験者のための生徒理解と相談体制の構築

創出した先進事例

◆実施に向けて検討した方策

① 日本語指導とそれに続く小中学校教育課程
② 進路保障にむけての保護者を含む相談体制と補習学習
③ SC, SSWを活用した相談体制
④ 校内研修会等の実施による教職員のスキルアップ及び、学校見学や各研修会（生徒会交流を含む）に参加し、先進事例の研究

◆検討した方策の分析

① 日本語習熟度におけるクラス編成を実施し、日本語指導授業カリキュラムの作成を行うことでより生徒の実態に応じた支援が可能。
② 様々な理由から学習の定着がはかれない生徒や途中入級・体験入学者へのサポート体制の構築、外国籍生徒への進路説明と補習学習を実施することは生徒の進路保障に有効である。
③ カウンセリングやケース会議等を実施し生徒理解に努めることは、様々な課題を抱える生徒への支援につながる。
④ 校内授業研や他校の公開授業に参加して授業力のアップをはかるとともに、生徒へのかかわり方等を研究することで生徒の進路保障につながる。

◆実際に行った方策

- 認定された5クラスを日本語の習熟度に合わせて6クラスに再編成して授業を実施。
- 日本語習熟度におけるクラス編成の日本語指導授業カリキュラムの作成。
- 授業者以外の教職員や専任スタッフ（ｽｸｰﾙｻﾎﾟｰﾄｽﾀｯﾌ）がTTや抽出授業など授業へのサポート。
- 学習の定着をはかる為、補習学習の実施。電話連絡や家庭訪問で登校の促し。
- 日本語指導のスキルアップをはかるため、校内授業研究会や外部講師による日本語指導研修会の実施。
- 外部講師を招いての研修会（人権、在留資格、交通安全、SC、SSW等）を実施して、生徒理解と教職員の意識向上をはかる。
- 他校での研修会（小学校、生徒会交流を含む）への参加、学校や施設の見学を通じて教職員の見聞を広め、様々な先進事例を知ることにより、自校の取組の見直しを行い、新たな取組の推進。
- 様々な手続きの補助や相談体制の構築。
- 専任スタッフ（通訳）の配置。

成果・課題

◆成果

- 日本語指導の初歩クラスにおいて、TTや個別による授業を行うことで丁寧な支援ができた。
- 高齢のため学校で長い時間過ごせない生徒、家事や残業等により早退・遅刻・欠席をする生徒に対して、教材を工夫し個別対応することができた。
- 様々なサポート体制を構築することで日本語習得の向上がみられ、6組から5組へ5人、5組から4組へ6人、4組から3組へ2人、3組から2組へ1人が進級することができた。
- 校内授業研や日本語指導研修を実施することで、日本語の授業における不安解消と授業力向上を図ることができた。また、様々な研修会を実施することで生徒理解と教職員の意識向上をはかることができた。
- 学校見学や研修会などで先進校や小学校の取組を見聞し、資料作成や授業の進め方など参考にすることで、取組のさらなる推進につながった。

ホワイトボード等を活用して個別対応

必要に応じて補充授業

ICTを活用した授業展開

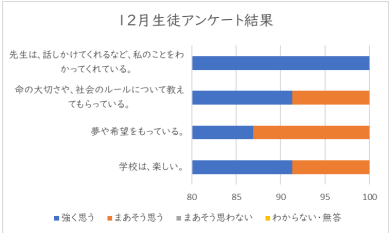
- 作文発表会を春と秋の2回実施した。作文の作成を通じて、生徒の学習状況を確認し、個に応じた教材について教員間で生徒の情報を共有することができた。また、発表会を通じて生徒同士で思いを共有することで、他者とのつながりや自己肯定感の醸成つながった。
- 専任スタッフ（通訳・ｽｸｰﾙｻﾎﾟｰﾄｽﾀｯﾌ）やボランティアスタッフの学習指導への協力もあり、高校進学希望者の全員進学や日本語習熟度別クラスの短期間での進級がみられ、日本語指導において効果がみられた。また、特別支援を必要とする生徒の個別指導においても安心して落ち着いて学習することができた。
- 様々な研修会（人権部落問題、在留資格、交通安全、SSW等）を実施することで、生徒理解と教職員の意識向上をはかることができた。

作文発表会

専任スタッフ(通訳)による学習支援・生活支援

交通安全教室

- 生活保護関連、就学援助関連、通学定期関連への相談援助、検尿や結核検診等の検査・検診の指導や病院への付き添いを含めた健康についての相談援助、住居、市役所等への相談援助などさまざまな相談体制を確立するとともに、保健講話や学校行事に参加することで、日本で生活する上でのルールやマナーを学び、安心・安全な学校生活を送ることができるようになっている。
- 夜間学級は学習できる場所である以上に、なんでも相談に応えてくれる信頼できる教員がいる安心できる居場所であり、生徒にとって重要なセーフティーネットとなることができた。



◆課題

- 多様な学習者のニーズに応じた日本語指導を学校として継続できるよう、教職員研修を行い、全員で見直すべき点を確認し、効果的な教育課程編成や教材作成の工夫について学ぶ必要がある。習熟度別のクラス編成に応じた指導カリキュラム及び個に応じた教材作成や専任スタッフの配置等により、日本語の理解度の向上が見られることから、今後も継続して取組を進める。
- 個に応じたより適切な学習課題の設定や指導方法の改善に活かしていくため、学習の理解度を見とる共通の基準等を設定し、丁寧に形成的な評価を行っていく必要がある。
- 進路相談や日本での生活アドバイス、カウンセリングのため多言語での通訳者が必要である。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

◆JSL等を活用した、個々の生徒に応じたカリキュラムづくり

- 一人ひとりの生徒の実態に応じて、カリキュラム作成及び形成的評価を行っていきたい。
- 生徒の日本語による学ぶ力の育成に向け、日本語の表現、教材の提示、指導法などを工夫していきたい。

【調査研究事項番号Ⅰ】団体名 東大阪市教育委員会

来年度（2024年度）の研究テーマへ

子どもの現状

在籍73人のうち55人（約75%）が外国籍生徒。日本、韓国、中国、ネパール、タイ、イランにルーツのある生徒が学んでいる。近年、日本に来て間もない日本語の習得を希望する生徒が増加している。また、既卒者は20人おり、中でも10～20代の不登校を経験した生徒も増加している。

16歳から88歳の幅広い年代の生徒が共に学んでいる。

学校園教育目標

①人権尊重の精神に則り、一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつける。
②国際理解と多文化共生の観点から、互いの違いを認め合い支え合う力を培う。
③あらゆる課題解決に向けて自ら学び、自らの思いや願いを発信できる力を培う。
④集団生活を通して自らを見つめ、自己肯定感を培う。
⑤健康について考え、自らの生活に活かしていく力をつける。

学校園めざす子ども像

□国際理解と多民族多文化共生、人権尊重の精神に徹し、豊かな人間関係を築き上げることができる生徒

（中学校区のめざす子ども像）

□ちがいを認め合い、豊かな人間関係をともに築き上げる子ども

保護者・地域の願い

・日本語がうまくなりたい。
・学びを取り戻したい。
・日本での生活の困りごとを聞いてほしい。
・夜間中学の存在が必要な人に届いてほしい。
・夜間中学の学びを充実させてほしい。
・地域に開かれた学校であってほしい

今年度の学校園経営方針

●自ら学び、自らの思いや願いを発信できる表現力、言語力を培う。
●異なる国・民族を互いに理解し尊重し、認め合い支えあえる集団を育成する。
●自尊感情を育み、自ら考え、判断し、行動する意欲と力を培う。
●健康について考え、自らの生活に活かしていく知識と行動力を養う。

重点目標				
	○生徒の実態に基づいた指導内容および指導方法の工夫改善をすすめ、夜間中学生が自分の立場を深く振り返れるような実践に努める。	○国際理解と多文化共生、人権尊重の精神に徹し、部落差別・民族差別・障がい者差別・性差別等の人権侵害を見ぬく知識と感性を養い、差別を許さず差別をなくす実践力を培う。	○本名とは何かや互いの文化について考え、自分の名前やルーツについて深く学ぶことを通して、自らの生き方を創造していく力を育むとともに、互いの名前や文化を大切にする集団の育成を図る。	○識字学級等と連帯し、国際識字年推進東大阪連絡会の趣旨に沿ったとりくみを推進する。

今年度
2023年度

布施夜間中学　研究テーマ『想いを綴る、伝える、「おとなの中学生」へ』

高齢者向けの教育課程の在り方

○成果
中学校区の学齢の子どもたちとの交流を通して、自らの経験・知識を還元できた。ICT を活用した個別の学び。
○課題
協働的な学びの促進。

不登校経験者の支援の在り方

○成果
教科横断の人権教育により、自分の立場や想いを仲間に話せる集団になりつつある。
○課題
一人ひとりちがう学習経験への対応。

日本語指導の在り方

○成果
日本語習熟度や進路希望について日本語指導支援員と情報共有。生徒アンケートの実施。
○課題
日本語習熟度の差異への対応。

ICT を活用した生徒の学習活動の支援の在り方

○成果
AI ドリルや電子黒板の有効活用が進んだ。
○課題
タブレットの持ち帰り

【調査研究事項番号Ⅰ】 団体名 東大阪市教育委員会

来年度（2024年度）の研究テーマへ

子どもの現状

近隣の中国人生徒多数を占め日本、韓国、中国、ネパール、フィリピン、パキスタン、イランの6ヶ国の生徒が登校。外国籍生徒数67人95%。日本国籍だが中国ルーツの生徒や外国で育った生徒も在籍。また、「学び直し」の生徒は25人。一人ひとりその背景や状況、学習経験が異なっている。

学校園教育目標

①人権尊重の精神に則り、一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつける。
②国際理解と多文化共生の観点から、互いの違いを認め合い支え合う力を培う。
③あらゆる課題解決に向けて自ら学び、自らの思いや願いを発信できる力を培う。
④集団生活を通して自らを見つめ、自己肯定感を培う。
⑤健康について考え、自らの生活に活かしていく力をつける。

学校園めざす子ども像

□日本社会の中での自分の立場を、近現代の歴史やその社会的背景と重ね合わせて認識し、現代社会を生きる中で、仲間とつながり、自分の思いや願いをきちんと表現していく生徒。

（中学校区のめざす子ども像）
□自分の夢生き方を創りつづける子

保護者・地域の願い

・日本語がうまくなりたい。
・学びを取り戻したい。
・日本での生活の困りごとを聞いてほしい。
・夜間中学の存在が必要な人に届いてほしい。
・夜間中学の学びを充実させてほしい。

今年度の学校園経営方針

●自ら学び、自らの思いや願いを発信できる表現力、言語力を培う。
●自尊感情を育み、自ら考え、判断し、行動する意欲と力を培う。
●異なる国・民族を互いに理解し尊重し、認め合い支えあえる集団を育成する。
●健康について考え、自らの生活に活かしていく知識と行動力を養う。

重点目標				
	○生徒の実態に基づいた指導内容および指導方法の工夫改善をすすめ、夜間中学生が自分の立場を深く振り返れるような実践に努める。	○国際理解と多文化共生、人権尊重の精神に徹し、部落差別・民族差別・障がい者差別・性差別等の人権侵害を見ぬく知識と感性を養い、差別を許さず差別をなくす実践力を培う。	○本名とは何かや互いの文化について考え、自分の名前やルーツについて深く学ぶことを通して、自らの生き方を創造していく力を育むとともに、互いの名前や文化を大切にする集団の育成を図る。	○識字学級等と連帯し、国際識字年推進東大阪連絡会の趣旨に沿ったとりくみを推進する。

今年度
2023年度

意岐部夜間中学校　研究テーマ『「おとなの中学生」～生き方を綴る～』

高齢者向けの教育課程の在り方

○成果
中学校区の学齢の子どもたちとの交流を通して、自らの経験・知識を還元できた。生徒企画の取り組みの増加。
○課題
より活発な意見交流。

不登校経験者の支援の在り方

○成果
教科横断の人権教育により、自分の立場や想いを仲間に話せる集団になりつつある。
○課題
一人ひとりちがう学習経験への対応。

日本語指導の在り方

○成果
研究授業にむけて全員で授業を検討。日本語指導支援の専門性から学ぶ。生徒アンケートの実施
○課題
欠席者の学習の積み重ね。

ICT を活用した生徒の学習活動の支援の在り方

○成果
AI ドリルの活用による個別最適化
○課題
タブレットの持ち帰り

調査研究事項番号Ⅰ：**教育課程、教育環境整備に関すること**【　神戸市教育委員会　】

研究テーマ「中学校教育を実施するに必要な日本語指導の在り方」

１．研究の目的・問題意識

・目　　的：教科の学習に必要な日本語の習得について

・問題意識：国籍や年齢、就学経験の異なる生徒の学力や日本語力の違いに対応する学習

２．実施に向けて検討した方策

・習熟度に応じた対応

・日本語習得状況に応じた対応

・各言語への対応

３．検討した方策の分析

・全生徒の各教科習熟状況と日本語習得状況等に合わせた定期的な学級編成の必要性

４．実際に行った方策

◇特別な教育課程の編成：習熟度別学級編成による授業

〈西野分校〉：国語、社会、数学、理科、英語は、それぞれ全校を６学級の習熟度別学級に編成

〈北　分校〉：国語は、全校を７学級の習熟度別学級に編成。

数学、英語は学年別に３学級ずつの習熟度別学級に編成

※実技科目については、２校とも全校を１学級として、教科担任を中心に全職員で授業を実施

◇具体的な活動内容

・教科指導：既存の教材及び生徒に応じて作成した教材の活用（パワーポイント、デジタル教材等）

各言語に翻訳対応した学習プリントの使用、多文化共生サポーターによる支援

・日本語指導：既存の教材及び生徒に応じて作成した教材の活用（パワーポイント、デジタル教材等）

外部講師による日本語指導

・作文指導：１年間の作文活動を通した自己の振り返りと日本語理解⇒作文発表会、文集製作

・新聞の活用（ＮＩＥ教育実践指定校）：各教科での学習から実生活につながる学習へ

・GIGA 端末を使った授業：調べ学習、学習問題作成、学習発表等

５．生じた成果・効果

・各教科授業や日本語指導による学習理解の深まりと日本語の習得

・教職員や生徒同士、他校生徒との交流を通した様々な日本語の習得や他の言語とのふれあい

⇒成就感、達成感の醸成⇒学習意欲へのつながり⇒自己肯定感の向上、他者理解

６．課題

・教員の日本語指導力の向上

生徒の学習活動へのより確かな見取りにつなげるための日本語指導の知識とスキルの充実

７．調査研究を踏まえた今後の取組方針

・日本語指導に関する職員研修の充実

外部の専門家を招き、日本語指導研修を重ね、指導法や最適教材、教育環境のアップデートを図る

・より効果的な学習教材の作成

個々の生徒の学習理解の程度に応じた教材、教具の作成

【調査研究事項Ⅰ】尼崎市立成良中学校琴城分校

１　調査の目的・問題意識

尼崎市立成良中学校琴城分校は、在籍する生徒の年齢は１８歳から８７歳までと幅広く、７０歳代以上が、生徒数の半数近くを占める。また、外国籍生徒が在籍生徒数の半数を超え、今後も増加していくことが見込まれる。こうした中、高齢者及び外国人生徒はそれぞれに抱えている課題が異なるため、全生徒への多様なカリキュラムを構築する必要があり、様々な社会的背景を持つ生徒にとって、安心感のある充実した学習環境を整えていかなければならない。高齢や日本語理解の問題だけではなく、様々な社会的な背景を持つ生徒が安心感のある充実した学習環境を整えていく必要がある。

生徒一人ひとりが、自他を尊重しつつ自己実現を図ることができるよう、言語力をはじめ基礎的・基本的な学力及び健康で文化的な生活を送れるよう教育活動の充実を図る。

２　調査研究の成果

〇高齢者や外国人向けのカリキュラム開発

・大阪産業大学国際学部国際学科　教授　新矢麻紀子氏を教員研修の講師として招聘し、「今日の夜間中学における識字・日本語指導について」をテーマにした教員研修を行った。「第二言語としての日本語習得に向けて、即興的対応と長期的対応」や「日本語を教える際に留意すること」など、効果的な日本語指導方法や多様な生徒への効果的なカリキュラムについて学び、意見交流を交えながら学びを深めた。

・神戸ＹＷＣＡ学院の識字・日本語指導講師　斎藤明子氏を研究授業や研究協議に招聘し、教員研修を行った。近年、中国帰国者やその家族をはじめ、新渡日のネパール人など、日本語習得を求める生徒が急増している。そのため、教科の学習以外に日本語の習得も視野に入れた指導が求められている。そこで、「第二言語としての日本語」教育の指導について指導・助言を受けた。

イ. 不登校経験者支援のための相談体制の整備

・無戸籍の人を支援する会の代表　市川真由美を教員研修の講師として招聘し、無戸籍の方が教育の機会や生活保護が受けられなかった現状を知り支援の在り方について理解を深めた。出生届の提出をしないということだけで、無国籍となり、教育が受けれなかったなどの事例を聞きながら人権教育の推進・拡充を図る上で、学びを深めた。

・絵本と点字の掛け合い朗読〈二人三脚〉を立ち上げ、視覚障害者への理解と晴眼者はどの様なお手伝いが出来るか・・・共に考える機会やまた朗読の素晴らしさを当事者である村上知佐子氏を教員研修の講師として招聘した。

　また、アイマスク体験することで視覚障害についての知見や視野を広げた。

・大手前大学　教授　芳田茂樹氏を招聘し、「生徒自身の自己肯定感を高める教育」についての講話や、授業の様子をみてもらい、今後の授業改善やカリキュラムの改善について指導助言を受けた。

〇他市町村の夜間中学との連携

・全国夜間中学研究会第６９回奈良大会では、尼崎市から２日間のべ８名の教員と４名の生徒が参加し、１名の生徒が全体会で発表した。また、準備段階から会議等を通して、兵庫県内４校の連携強化はもとより、全夜中研や近夜中協との関係の充実を図ることもできた。他市町の夜間中学と自校の成果や課題を直接的に聞き、質問や意見交換を行うことができた。先進地域での取組を情報収集するとともに、環境整備を含めた教育活動の充実を図るうえで、有意義な全国大会への参加となった。

〇専門スタッフ（通訳など）を活用した教育活動の在り方について

・外国籍の生徒が多い中、学校行事や校外指導において、多文化共生支援者（通訳）等の支援により、安全面の配慮ができた。また、本校の生徒募集のチラシを作成する際、多文化共生支援者（通訳）を介して、教員や友達と意見交流を活発にできた。

〇ＩＣＴを活用した生徒の学習活動の支援について

授業においても、動画教材を適宜使用し、生徒の学習理解に繋げることができた。タブレットを使ったことのない高齢の生徒も多いため、ＩＣＴ支援員を活用し、支援員が生徒に基本的な操作方法等を伝えることで、学習進度に差が出ないよう工夫した。

タブレットを使ったことのない高齢の生徒も多いため、ＩＣＴ支援員と連携し、楽しく活動できるよう工夫した。

３　今後の取組方針

本校では、様々な社会的背景のある多様な生徒に対応していく必要があり、特に今後も増加することが見込まれる外国籍生徒への支援を継続して充実させる必要があるため、通訳などの専門スタッフの活用が引き続き必須であると考える。また、学びたいと思う生徒の気持ちを尊重するため、高齢者や外国人向けのカリキュラムを引き続き研究推進する必要がある。個別のニーズに合わせた柔軟な学習環境を整え、生徒が安心して学べる環境づくりに努めていく。個別のニーズに合わせた柔軟な学習環境を模索していく必要がある。

また、ＩＣＴ活用を通して、生徒たちが柔軟に学び、自主的に学べる機会を提供していくことで、生徒自身がそれぞれの学び方を身に付けていけるようしたい。そして、生徒一人ひとりの社会的自立に向け、キャリア教育を充実させ、琴城分校を卒業したあと、自分らしい生き方を実現してもらいたい。

研究テーマ　❷「不登校経験者の支援の在り方」
③「中学校教育を実施するに必要な日本語指導の在り方」

調査の目的・問題意識

◆目的

❷不登校をはじめ多様な背景を持つ生徒支援のための相談体制の整備を行う。
③日本語について「話せない」「読めない」「書けない」など様々な課題を持つ生徒一人ひとりの学びの充実を図り、効果的な学習指導の方策を研究する。
③夜間学級未経験教員の授業力向上を図る。

◆問題意識

❷個々の生徒が抱えている過去の人生経験を十分に配慮しながら、将来の生き方を見据えた進路指導や教育相談が必要
③学習の目的を明確にし、個々の習熟度や特性に応じた指導方法の工夫などの対応が必要

創出した先進事例

◆実施に向けて検討した方策

❷カウンセリングマインドを高める
❷ソーシャルワーク的視点を持つ
❷関係機関との連携
❷③個々の情報の収集
❷③実態把握のためのアセスメント
❷③生徒への日頃のケア
❷③生徒が安心して話せる雰囲気づくり
❷③教員と生徒の信頼関係の構築
③日本語指導方法の改善
③生徒個々のニーズに応じたオリジナル教材の作成
③日常生活に必要な日本語指導

◆検討した方策の分析

❷生徒がストレスを溜め込まないよう気軽に相談できる雰囲気を学校全体でつくっていくために、教員個々のカウンセリングマインドをより一層高める必要がある。また、様々な問題は、教員だけで解決できないことも多い。多種多様な要因を背景とした生徒の相談に対しては、生徒の置かれている状況や抱えている問題・悩みに応じた分野の関係機関や社会とつなげることが必要である。

③日本の学校生活や社会生活について必要な知識を学び、日常的に使う言葉などについて、その生徒にとって緊急性の高いものから順に指導を行うことをはじめ、日本語で行われる授業に参加し、周囲の支援や様々な関わりを通して支障なく学習に取り組むことができるよう日本語指導を行うことが必要である。

◆実際に行った方策

❷・不登校等の理由で形式的に卒業した生徒、年齢層の幅がある生徒、外国籍生徒等の個々の多様性や特性に対応するため、カウンセリングマインドや、特別な配慮を要する生徒（不登校経験者を含む）への支援、ソーシャルワークについて学び、相談体制の充実を図った。
・日頃からのコミュニケーション（あいさつ・声掛け・丁寧で優しい言葉遣い　等）。
・小さなつぶやきや素振りを逃さない。
・生徒の心に寄り添い本人の訴えを受け止める。

・登校しにくい生徒への学習支援（家庭での学習等の支援）。
・関係機関との連携。
・生徒一人に対して複数の教員がついて学習できる環境づくりの推進。

③・日本語指導の専門家を招き、校内研修を実施し、作成したオリジナル教材を活用した研究授業・研究協議を行い、指導力の向上を図った。
・授業のリズムや速度に留意する。（気づかないうちに速くなる傾向がある）
・生徒が主体となる指導方法を工夫し、積極的にほめる。
・個々の生徒のニーズに応じたオリジナル教材を作成する。
・「書く」場面を意識的に作る。
・それぞれの国の文化や習慣などを紹介し日本語（日本）をはじめ、お互いの国の理解につなげる。

◆生じた成果・効果

❷・日頃からのコミュニケーションを大切にし、生徒の心に寄り添い本人の訴えを受け止めることで、生徒との良好な関係を築くことができ、相談に応じることが増え生徒が安心して学校生活を送ることができるようになり、出席率が向上した。
・本人の希望や個々の置かれている状況に配慮しながら生徒の心に寄り添い進路相談を行い3年生の進路実現へとつなげることができた。
・登校しにくい生徒への家庭学習の支援（家庭で取り組める課題を出す）を行うことで学習意欲の向上につながった。
・必要に応じて生徒やその家族をカウンセラーやソーシャルワーカーなど関係機関とつなげることができた。

③・授業のリズムや速度に留意することにより生徒の気持ちにも余裕が生まれ授業の雰囲気が良くなった。
・生徒が主体となることで表現する機会が増え、日本語でのコミュニケーション力の向上につながった。
・小さなことでもほめることで学習意欲の向上につながった。
・視覚的効果を活用したオリジナル教材を作成、使用することで言葉や文字の分からない生徒に理解しやすい指導ができた。
・「書く」とともに「声に出す」指導を行い「読み書き」に対する自信をつけることができた。
・互いの文化を知り合うことで相手を尊敬する気持ちが生まれ人間関係が円滑になった。

◆課題

・相談体制の整備や関係機関とも連携を行い適切な支援を図ってきたが、まだまだ十分とは言い難い。また、継続的な連携につながるような成果を出せなかったという課題が残った。
・日本語指導については、外国籍生徒が日本の高校に進学することもあり、日常生活に必要な最低限の日本語指導から日本の高校受験に対応できる日本語指導まで幅広い対応を迫られている。そのため、一層の指導方法の改善や自主教材の作成等を継続していく必要がある。日本語の専門学校や、大学で留学生を教えている日本語の指導方法も学ぶ必要性があるのではと考える。

調査研究を踏まえた今後の取組方針

◈教育環境の整備・充実

・今年度実施した方策を継続して取り組み、まだまだ十分とは言い難い現状をふまえ、不登校経験者向けの支援の在り方を研究し、相談体制や自立支援のための体制の整備を行う。
・日本語指導において幅広い対応を迫られている現状から今年度実施した方策を継続して取り組み、中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方について研究し、生徒一人ひとりの学びの充実を図る。